無言抄 上

特別
へ5
6188
1

和言抄巻上

世より海士乃子なれはさるしつきと侍りしを
聞しのふやあまを和海の濱乃真砂をかそへめ
し一足よりたとりありしみちも和りもひき
ちの山松乃葉をかれあれはわれ古人言行の善悪
思ひえらひ世の葉和語りたれのあらんとむかしのゆゑ
のえいりつりのことわさやさしき是をおほく翁火
心れかく語かし見てことをりとめまわしくおかれ
えた風俗を和ての情をひきめていはしむとまへは
いさゝかくちいはすさひをれと和言抄となやせん

[seal] 帝國圖書館藏

特
へ5
6188
1

根一重

58 2155

志かも六種乃志な〳〵ありそれを
定ていひ侍らん事かたし

一 式目濫觴
二 以呂波詞
三 四季詞
四 非季詞
五 神祇
六 釋教
七 述懐
八 哀傷
九 山類
十 水邊
十一 体用之物
十二 可隔三句物
十三 可隔五句物
十四 可隔七句物
十五 一之而可嫌物
十六 輪廻の事
十七 嫌詞之事
十八 可思惟事
十九 發句切字之事
二十 句數之事

卅一　女方取様のこと　　卅二　総筆のこと
卅三　一座法度の事
卅四　會席作法のこと
卅五　和漢篇

巻　終

一　式目濫觴

夫連歌根源は人王十二代景行天皇四十年日本武尊東夷征伐乃時甲斐国酒折の宮にて新治筑波乃詞よりおこりて柿本式目元来は建治二年より鎌倉将軍においてゝ為相卿の式作にて其後新式目は大納言為藤卿の作也然るを後普光園摂政応安五年に改め被書加へ示し新式目追加と号す又新式今案とは後常恩寺関白殿下諸乃好士の規矩を集て定法卿に相談ありし時の宗匠として御作しけるとなり

享徳元年小書號よ心敬宗祇よ述去乃後
毎度及諍論事也某ぬ給之文亀二年よ肖柏
老人　勅をうけ奉りおさめひろひ書改む
今あまねく用捨新式乃一冊是也

景行天皇　四十年より天正九年まて千五百十年

後宇多院御宇　建治二年より応安五年まて九十七年

後円融院御宇　応安五年より享徳元年まて八十一年

後花園院御宇　享徳元年より文亀二年まて五十一年

後柏原院御宇　文亀二年より天正九まて八十年

正親町院御宇　天正九年よ記之
建治二年より天正九年まて三百六年り

今上皇帝　慶長二年正月清書之

二

以呂波詞

以

岩船　天津神國津神乃かゝりあふ舟なり日本紀上巻ニ天磐樟船といへるも同しやうなる事なりあれとも此乃字ニハつねのごとく七句をたれつきなり

伊勢乃神　といふをも名所やあけて侍神といひてハ名所ニあらすあれとも名所ニあらすとハいふ歎なり

いつきの宮　伊勢乃斎宮賀茂乃斎院行もいつきのみやといふありいせにても行のみやの所まかり賀茂ニてハありきの御前乃まゐるなり

放生（いけるをはなつ） 神祇なり又は通なり嫌や生類に二
句嫌ふ八幡大菩薩の神力にて養老
年中に夷敵をほろぼしたまひしゆへに其
かたきのたましひをなぐさめんとて放生会
を始め給ふ長者子流水にて池魚のいのちをたすけ給ふ
いきものを見ること まことに天児屋根の命何も春日四所
しらぬ実にのうちのみなり日本の神
國なりより先三乃三尾一ろ乃御子を
かれあはれとそあるなり
いみ見す 神祇なり神事なりなとある時はふせぐよのつねにて松竹梅なとにさす
まなり
家とい出 釈教なり居所にあらず家といふ字には斟酌すべき
ならぬ也

出る月 朝附なるゆへあるを旅生とも打越にあしたの神きんしやくあるべしもの
そうての心うちがんようなり
いざよひ月 月日に不嫌ふ事といふ字には折を嫌ふなり梅や桜なるなり
いなびかり 秋や秋なるなりあるまで あるかこによきらふなり
いせゆふ せうしは生類に二句きらふ 山ハきらひといふ
岩いはうか 川合て二つ一つは決まとも 折を嫌ふて其趣
岩いしなとり 春殊にふたつつ いわや 居所に打越を嫌ふべし
いそのかみ 居所にあるも打越 岩屋 坐
きたの詞人倫のうへなどふいひなるとも 植物や かしかし

石たゝみいしへにしなりてを無て
とふ縁あしもりを無て付る也し
岩橋 山彰りあしきて赤乃
いもはしかり山彰なり
石清水 八幡宮坂より続しすたきよれ
あるや大かたハ八幡桐坂と心得ても
生田（いくた） とふ所森と流きて又ゆりの名所
りくし題りても不可付く池准し
池 一名前よ一と彰武用ゐし此彰なり
しそれ乃文字ふたまうひ難し
泉 と云句ょ廣澤と付るを悪しかりけり
生田を付るふハゆるへ一絶たし
ふあとふ字付まへりしま夏や
きぬ付にとまれた難なり
いさり ょ出流を付るま不嫌ぬるや
いさりといふ事川ょハまへりす

稲 一本一株此外ょ稲乃田うるあとも
とり無てありいねの外ょいなむしろ
衣裳（いしやう）乃色 花 木 いう無りのりあり
まきとい八とも草木
ま二句嫌也数ゑいろ花をめるを以彰成
ゆもりそ乃色をかくょ季をりけゆく
せいふりうるふかとくうしわめ紀ふ
色 まあし又紅葉錦乃類きらふなり
家 風 小家あるし吹拂まうしきる字
まそいふ彰い付きもう粉乃名なり
二句嫌無しりとまり風といふ字ふハ同字
去きり居不りうりこしをきらふなり
いえ 居不り二句なり居不り
二彰武ふハいかりと二せあわとも
巻 きらふんといふ縁あし
を代いひくまとも二やたしいなり

いなり也二義あり
板間 居なり二句嫌なり居なりのこともいふ説あれともたゝ板
間なとにかしかす
入逢 は入乃字相の字ともに二句嫌なり
字義の字は不嫌といふ説悪し嫌也
市 一座に一出乃
数也かし
いせ紀行 は予前にも付る事不一なり
何のとても此式の数すくなきや
いり婿 人倫なりいとも耕乃字ありあときい
らふ乃也いとゝ恋付句ともきらいそ
とい説あし
生死 は去申しいつれもはなれ句ともは二句きら
いの病ものくまいなり去申流くは
いの涙也もくはいなり清也

命 一息歎ゝの数乃いのちはゆるとも又
あり恋しきは二なり
いとし恋 たく一句御句文句なりかし
からといふ恋二句きらふ恋の恋とく
偽 いつはり もとも二句きらふなりかし
ほの絹いはいうとも一句恋し
いまは 今は付句也ならし
うしろ 地流く
流ゝ くも二いかに流ら一折てとの恋
てのなりいかく二の恋は折と嫌也
いとく涙くふ恋ても也いひてハ
それあしいかに二句きらふなり
流しう なとにいふともたく一や果咲と
けとも何乃字は同しく二句嫌へ
いかゝ於ん なとも折りの五つれ何もとて一や
あるひてさくハ又可き此准く

いうにせん　上乃句なり下ハかくの
猶〳〵　は何乃字二句きらふ也　ことくなし
いく　小何乃字付句を嫌也　きらつとゝいふ説あし
みえくるしし
赤日　赤日は日次乃日二句きらふ也一日
うけあとゝいふ数たこれをきらふハまた
いふ　小うたる文字にてふあるのてふといふ
羽おいつまを二句きらふ也
一文字　字二三字ハ下知りは一流とと
乃まちるをくく八まで余のかず
い色とも嫌はけあるといひて八知るやを
いうといふ也り流といひ三日ある也といふへ
てわり一つとゝいふや四と六七あ
よみかぞ字その男一向不嫌付句とも不

若百乃字ある也八百韻ほどりあるべし
然れとも旅行よ新やしそて小年じや
うけり仕立たるん句旅ゝまうこハ旅あし
旅あしも二もいうといひ也り

ろ

ろふ　居不乃旅ある

は

葉ある乃神　拙雅りきらふなり
雑なり
花　四あり三も不苦といふ説あし〳〵流れも
二三四まて続ハ知りをうゆるあり
花ね葉　少流〳〵言ても勿論正花なり雑
あり四乃内や如しうるの毎季とう

字たる物ハ何を雑や仏神ニよせてその
清ニなるまじきまてその季ニなるなす場所
花乃あさ面ノ桜嫌なり其ころ乃花似物
の花ハなとハいへれもうらふハこれある
色さとりふてろすれもその旨ハ悪し
春ハなり正花ノすのゆへニ此花ニよう
又ハ其色うしもまなりさくらつまそハく
添しもくさなり

花 ノ付る風霞乃類と新式遠輪廻去
可まきし去来除る不及其沙汰なといふ
を花ニう揃みすを月ニ霧霧ニ文の新耳ニ
春のめもの入ハ加りかハり句数を隔てまと
色しとりふまなり処准之

む乃宿 月乃宿何も居所なり花とやと
なとハ居所なりあるまとい色も
句拵なりまつ延し

花乃数 小梅桜なとのちるハ折と嫌ふ
ちるあきうら数なとハ字去なや

若れの葉 小葉の皆ハあしく白けのた
つるなとハなるまじき也 准之

はなれちる 何うけハ新なり心ニ雑
あしきなり
乃けも数うけたみな陰乃字なり漢ニハ花
部なとるといふり

花乃香 袖の香などハ折と嫌花乃色ニ
まとふニ袖の香人香なと嫌て
ときらふ色し

む乃あはし 人倫や仏可依句許らまう
せてさいらふそハ人倫よらず

花と付し 月と友同じく
人倫よあれ 花乃錦き
りようと色物や帆浮物あり行人の志る

まゝなれとも初学乃ハあやまりぬへく
花乃雪 此所ハ植物やうきに用ゆれハ植物なり
なれとも見立けやうなかへなり
はなの雪 花乃波もれの滝 以上けし 皆
雑なり
きらふとハ植物凝算物に遣ふ何も雑ハ嫌と
是心なりとも花乃詩用あといふ無とも是れ嫌
ちる詩をいふ無もこれハ植物乃ことなりなり
たとへハ受御説のなり
花ともいふ句 小野山をなりといひても
此字入ともなりを依たるハ花と見るてい 難ありをたとい振と
なりえたるなり
花よきるやうといふとも二句嫌といふ説
ありとわれを嫌嫌し花花ちやうといふ
詞正花なり無し但可依句ふといふなり

花ふかし野 付の事嫌なり殊ニ安越建
はなの都 もみちり詩用用あなり
花のもとうきれ乃袖ハ 正花や正花なるハ皆此説所にて代人の見出せる説や不可用之
植物や正花也 但句弥ハまろ
無ミことふといふなり
も衣 正花なり植物にて二句嫌ハ衣ものの
ろかや花も花あそても用あたるなし
花さかり 正花なりその故ハ椿は常わまや式
小ハ芸州彭くのまなとたむくろ物や
発句勝者三乃外面ふせひ出ては嫌なる
まる 地くま住之一のおり下句乃花悪し
おとのハ経の中 説なりくるしうしま
花野ハまそくになとのやうなるわ付の事
あらく如此乃心物とふあるか

葉。ふきしなそこそ乃もなと五句嫌なりとて
といひてハそう一向きらハす

葉乃字 四とハあをも若をさゝぬ
えふそめる古やかくて葉乃も竹乃
し面を嫌とふハあしくこれハ折ときらふなり

春秋月 只一季に一三日月一と新式に
ありりとよひ春乃よの月なと
いひて一長閑なるなと明るといひて一三日月
乃うちもしかるといひて八とこや夜乃月冬の
月同おなりといひ無ろ可なりあやまり多なり
不捨是明なる一他季に一句と二なり三日
月其四季乃句なたゝ一なり一座に五句乃
ものうちに入ものハたゝ月とも明と三日
月と三裕りさけく一季ニあまりと云
ことなり

春乃宮 むかしよりとかくいはれきや式
目にも春によるへきといへり

春の日 とい句よみの作心ありて永日とそ
きゝ日とも打を可嫌ばかり乃句も同
おなしかれとも句からよれは無き也

はる乃雪 是て花乃雪なと有へからすとはいへ
中古の儀や今ハくはしからす

春の物 たゝ一春乃うちとかりと入て又一
とあまりとも近代いひゆるかなよ
そうすニなり嫌ふ物打にも同あれ春乃物と所
を入て二かるし嫌ふも打の物も其あるし いはねても
かりを入て二そ無し

橋 只一御階一名所ニ一字橋一変乃あれと
しかといひて一と式目によらくれて
是ていうり見くし可有之夢のうき橋
も又たゝ浮橋も橋乃字あれて打を嫌無し

嶋　句嫌人嫌ありし

里山　は山乃文字を嫌ふ事なしといへり山
乃字なり折をきらふなり

原　は野二句嫌ふべし松原なとは野不嫌
あるゆゑ乃原葉乃原なとは野を嫌ふと云事

京　小野京などといへるとふて有也　但許り
まろくしとある抄物にあけりこれハ又
野にもとあるべき事無用といふ心なるへし
名所にいひ嫌ふとも嫌去といへり不苦とそ
乃京乃嫌て八五句さりなり

濱ひさし　は波乃よせ方乃まへ乃ひさし
小家ともいふなり句にゆれ也いへり又濱にある
二句嫌なり但句乃あしそうろうてゆるす可
嫌ふ事一説有之定家卿乃前乃書にあ

菴乃海の潟ひさしといふ事はてゆく
居所なりとぞ抄物にいへり
又居所や式抄物に此居所と付ては不謂
なり

はしら　居所二句嫌ふべし

まくら　とふことは小よりは同字なと云ふ
す同字なりとも付句もならんし
なおもりにも小百韻に二つありなり
名やうれ詞なれて是小准也

はまの　はゆなといふことそいふも一致小

まくら　二流く有也

さ濱く　といふ詞毎雪なとはてなく又別
乃もやうなるてある嫌なり

はつ南記　只一点り一とあまよもいはなり
　　かしても二ありや　近代ニ乃

謀（ばうこと）もうなにとも云かし二句さらふ無し
ちり　これらてハなけれともやうてきらふ
なり
はや　と云ともにそもやと一向不嫌く
も　といふてにをそにさもあらハあれといふは
り　しまうハ其他と書故なり
えとハ二句嫌なりうそてし此さ乃てにを
え濁音えみなニ句さらふなり
贄に　生れ又二句さらふなり依句祢祇うあう
さらりりされや贄なやいふ事ハ文
別乃ちなり

庭火　祢祇なり冬なり庭乃物りと赤
ふ無し
庭と物の名物と嫌なり物をうんてき五
句去や物うすりて物ハきらふも折
かりてハ二句去もまく
庭　只一寺皇居ホ乃名う一庭のをへハ名
別のまるり縦ホそ乃訓とたしく
ふ故う物りとう無し
庭乃所さ山　山まよ二句きらふやし
小をなり　こ居ホり二句嫌七る
とい字ホし二句なり
鶏　異鳥也られ乃とり物なりまや異名ハ
ゆふつけとりちうけなれしきあえ
せて二といふ無りたしホハとり千代用
梓乃ことそ気

にほの海　あふミの地名なり名所集り
なり三句さらふ也し　近江の名なり入ゆへに式にも
白ひ　小香面ときらふ也しくまとも
りの也り秋之　ある面り桜梅十にても
小粉ちゝく花　くりのところは入
似物の類　是れと梅のもすてに也そ
にても卯の花の雪なとにてある也そ
ありき従ふ　あつ也したとへて雪ぢりを梅と
ことにてある也こ
緑り　り若葉付くるをはし　赤もあるい
ひとをかめてい也え花もちら梅也やく
のごとくすりまハりけれ取ふも秋く同す
をある小て三ケ所にものそはりのえんは
ひれくまつねやまれるかあり

小雨り　よまにくとなつまハ一句去
　まとてつそ
同小雨の星　小たまと小雨の時にて梅やれ
　めひなと小てかれうれ
　二句去や小て小雨りのとまとく
小そ小雨り　字のおりをえとつりぬけ影なり
やか
ほや消く露　嫁なり七月廿日信別見さ山
　まりかつくろうりやなり
星とともなる　帝王の元正の暁高年星
　とあし多くかれるや粗下出う
秋く　星　月日ともまた句梅やく日次の日
　月の月小ハ二句去り
星月夜　嫁なり月の字りハあるき
　ら（ふ）也し

郭公　一かたらひのなとゝいひて一ゝ
と二つまて時鳥ならてはきこえさる
なかなかも
なし
時鳥　有り涼しきなと付まかしくさしあひ
小いあり稀にも師資お受なりゆへや
くもらう紀の句別　分別なり
鶯　只一度なり　冬なり　秋なり
みな迄にあるまて
かた　なり
かそはこ　とつりハ名残りありてはせのか
そはこなといものえ句編名残なり
かとり　小野山色なとの道の字二句
さゝ色し
かの見して　なとの内の類百韻に
二つなり能様く
色

年を経て　かやうの類は京を経てなと
にも類一向はゝかるにて
道の色　なとの色ありありなと二句去
らふ色し
やま
せ木の　秋なりありてはのの字にある
きらふ冬なり
年　二つ当と一ツになとして一つしてい
して八年二の内やうしといひあり
りそゆへなり
年こゆる　なとはいふは季ハきてなと付る
事同さなりしたゝとこゝ此詩題
年暮て　といふり季を紀同お毎度に
彭さし出の中へ入り織之同さ
の事下巻りくまし見给ふ

遠里小野　名所なり居所にあらすと
いふ説あり居所にあらすとも
戸　いやとかく関乃戸岩戸なとの名を
戸を替るなりとさて岩乃戸なとも戸の
内なるやしといふことも内にハ戸の外なるへき
事を云説を能去又戸乃外り治定を天乃
戸ハ居所なりけりとて名所のまゝや
戸　ハ門といふハなとえられたとおもてとき
戸　にあらなり

戸をあらゆる　小乗乃かゝる付句にかゝり嫌ふや
おもしろくありの所に委しく
と紙きよく　用くとを云なとくもに
乗なりあしき
とゞ　居所にも　二句や
とゞや　二句遍にあしき　居所なりハ嫌ふ
きらふなり

管ひく舟　などといふ付物あしく此類付
ろみな浮具なり
と汁井をる　とふ猶乗なり
友　只一あ獣なと小一月花を友などハ人偏
乃ともよりおなしきを申るといふ説あり　え
又一あるり
些も絶　りり友乃字不嫌之といふり紀打
ミしを嫌ふさいと申せとしうり
虎　かくいうて只一なり兎猫犬狐わ乃字
やけき地乃獣みな百類り一なり
鳥　只一並鳥一に乃外小より村より嫌ふに
一鳥郡といひて一禽獣生類の越え名あれ
えなりなりえ乃鳥ハりとより雉なりと紀行の
鳥ハ村より為なり楽より八鶴や此木も名所
乃中なり名乃あるよりハ五句去なり

馬乃鞍嗚　なと小鷹乃部なくなとあ
馬の嘶ハ　りてと嫌なり句なこなと付句を
嫌なり俳雑之
鳥　なり米とりなとの句ある也用ひ哉て
之れしうさうやちとりも同前
鳥乃羽ニ打し　武乃風軒辺ちく
馬りうかとり哉てと
きらふ也まり
鳥乃鳴ろ　毎つろなとして八派れと
馬くつ　乗合りあるを
なと以ふ飼ははを打鞭と嫌なり
取と以ふ字まハ五句去也俳雑之
泊舟　乗合りあるを嫌と以ふ字うれ
五句去まし嫌なり

此とまり　此過なり舟なくてハいくとい
舎りゆきとまりかなとハ別乃事
なりとまり山まてハりとよりなと各別の事
や特乃事あるくなり
灯　只一灯乃灯一法の灯一切りとう並て
以ま三なり五句去也何も打ときらふ
なりおまの火も打と嫌なり哉てとう並て
なりしもといふすあし又は紙去る
並うしは蛍火似句中すゆ人よ哉てとくに
くあるやしといふりし理よ可治定同すす
をと以ひせをやうきわも破邪顕正乃去也
ともし　夜なり　詠　まよふと以ふ字去
弗なや　並りしを
遠き　ことくろりとも二句
嫌なり遠と云字ハある句去也　とおる
小関なと付るすれし用事也俳雑之

ち

千早振　千乃字にあるかりす嫌千乃字振の字ともに二句かけてきらふ
をきらふといふなり
千乃字　打に一つや依て異説雖有
為明卿指南者也
受御説御方乃不審忠
ちより　うちの字打ときらふ也し
千種　千名葉付くるきたくさり
名葉も名所なりもそ
千里　とかりハ居不りあるい
路　と語よ句七句去と云事不揃也
ある句去や

路と道　よの句もある句去や但し山ち舟
語なとり又乃名なとふ行歩
なとふ行歩なりぬ路よこかりぬの名二句
まあらぬみち二句きらふなり又漢語雲語
きらふなり
路　よ岩地きら地一向不嫌之但語乃心に
用ひらん句なりて付候ハん事用捨有也
ちまた　まきらひなり　まや二句きらふ
也し
数　とい字ゆえりて八五句さりなり用
挙てり不岩範乃ちかり萬葉にあ
ちかなりも嫌やしそりれ不りも入
ちりなりも
茅乃輪　ゐて茅京洞茅生なとも有へ
らそ内只一なりちれ去や
茎　一ちりの世なとりして去さあれ
也し

契 といふ句ハたのむるなどといふ詞なれハ
またなにも恋句に付つやたとへは
ちきりおきつる事乃かなふまじといふまた乃
めつくまうてなといふ句あしたのめせハ
めく神ハ幾とせしなといひくれうれしさつき
ほとの土まふらく心悪てつまといひさせる
ことふそハなけれともなりくるしく候ほとの
ますよつかれハまうすの下ゟり心あり由へこそか
ゑもしとなりたく恋ハ肉さ乃こ成
とのなり

り

まうのをしく 雑や經文の言歌なと
ありの時流れ輪廻 ハあまりにあまり
なましともあるやし 詩歌 藤れつまりた
んともくなり

ぬ

ぬし 人倫なりあるしとおなしといふ心
ぬの すなはち伏 しんるいなり
ぬの 二句嫌なりくるしからすとなり
すとありいにしへハ一字ハなきなり
こひとよぶ衣類也なり
ぬれ 衣をいふ詞かりと嫌雨を嫌とふ
あしぬれハ小そでにも雨を嫌なり
ぬまく 神祇 おもしろぬれハぬれて心まてうちて
ぬれ 恋の心なくハ涙も一向不嫌之
かくち神をおもひぬれとやもいふく恋なり涓
なり二句きらふなり絶二句隔ても苦からし
恋の五句乃内なりハ不嫌
絶 ぬれ なとといふぬれとも詞ぬれとくれる
二句嫌ぬれとく乃あるも二句也

ぬるとは詞にぬきけるハ二句つゞり趣也
くれ詞何もおなじ
ぬ乃ぬとどろんぬ　と乃る付句をも
とどろんぬよめるもおもひ乃きれハこゝろふや
万事一遍んりつゞりもく乃ことゞ乃のさ
くひをぬかにかぎるさく手なり
不趣又ぬ乃ぬと
ぬ乃ぬとぬのぬ　乃あひさらハ付
句つゞり趣也し
ぞどろんぬとどろんぬ　乃よるこれハまた
二句趣
ぬらん　京の乃三つ乃よあり何も百韻よ
二おりよありおりもいつくれことく
乃三つ乃よそをきらふなり

　哉

ぞハ浮く　かよのおもくとぬくく乃に二句
趣なりたくおもくおもくかとれ
不趣くらしよる乃うれし上趣ぬくきたると
ぬ絵あれよもむつ色りも是も趣あり
そ乃由へハこれとくるとさこらく小なりく
おくりきらふよの絵ゆなり
これならよ趣る　かよのおもよありニ句趣也
何もて小とさの一つ乃
乃よありおもし
さかりらんこれおもらん
かとおもくんと
ぬふりかよつく
由へり日両を趣とぬ絵あり一向不得意
おこゝろまかそなくらんとありまでなり化
唯こく

　否

思乃座々し　座ふりありきといふ説悪し
座ふなり
思　百韻よ二ひとり八名ふ去るやし　池湊
清磯渚濱汀洲興尾上榛嵩坂池
谷乃れいと一もなふ去るやし
遅日　遅て永日なし　春乃日なかの心歟
もりしみ乃ふり入
小野　二つわも一八名ふ去るへしといへり
小舟　まさてありとふねと又有やしといふ
説ありしまるとつく見ゆへなり
小と小　をと説さしつ　小と小　をとことよめ
なる嫌へし　二句嫌なり
小と小　をとさとしつ　乃をよ小の
付句計嫌や　をとり　字不嫌男
廉ともくゆへなりさをしくれハ小乃字付句嫌

をとなきし　かくのと記乃数たく
一なり
をし孫　植なり二句嫌といふ説あしく
めなきらふ也し
女　女句にても一なり　近年世に用語乃
綱といへり但女句をもふとも出てもよろし
うつまし幸く
親　親子二句きらふへし
音　小弾　卿者ホ二句きらふなり急に記よ
音頭山音堂川ホ可嫌之　但し哉言
え山彼乃ととなし河あともうて二句きらふ
なり綫准く
をと　りとふわ二句きらふなり　信の
字付をとつれとよむゆへ
なり

をだまき　緒乃事をまくを云なり苧
縁ハ枝もなし古まきのまきなり花も嫌ふ也
めぐりをまきまれとよめ
句移りよりも候へし絶縁之
遠近と詠てハたゞ一なりまたとえ
なり又折をり無て有やしまたまらと
なり二も有やしまたまらふ遠乃字近の
字ともなり二句さらふ嫌し
まなり　田懐なりあれもを

わ

我者　といひても人偏よあるを平人のよふ
無き詞よあるを如しさ乃用捨肝要也
他句りも新無しといふとも七よう
なり

和田乃原　海なり折を嫌なり田乃字
なりハきらハれ
まうし舟　楫なり川舟ハたびなり縁
ともに泥乃河舟ハたびなり川
遠乃まうし舟なとしても楫なり
葦葉　たゞまとも又楫をかくれ名をいふね
とも覚え名なりあしともまきし縁
え覚名なりいつてたゞ葉之物なり草葉と
ハ無名小といふといふ無り
葦葉　色々をすなとしても葉たゞ一也
たゞ一二乃外ハ葉なしなとしてもを
まで田　う色物なり二句嫌やしまやまたも
なといふく式なりきらふ無さ乃
まれ草　まきうてといふ字なり二句嫌也
書通り小ハ豈葉といふなりまえ
まれるり

ちりはよるハ是なり又清輔抄ハ道学に
りあるとよなり仍坊主和歌語にておきても
と見えし参り治定ハ道学なり毛詩に其文
に学といへり

まれしるゝ　まもれりとといふ心なり
非といふ字は二句嫌なり

別ハ小り無ろ　たいなとりハくるしからずも
まよくて深き秋のあしや
きねはり無ろらんといふ句ハ山路今まで
菓そまろくなよあんなり意ハ同じなり
ゆくりまろわはり無ろきらふなり

一人乃別は馬乃無ろむり小り無ろなと
乃秋きらひもきらいひ

まれしう哀く二句嫌とそたひ乃まれり
恋乃まあく乃すなり　意のまれは云
乃哀くとハ替りてを嫌なり

まれハ餞一句きらふなり分乃字同前也
句ハすり無来也

加ハ

非只一非代一名非一とあれども名非とも
ハ　合て二なり
小りきなり三句嫌なり　くまく見新式
かくこりあり

非楽冬や秋分なり非ハ替てを嫌なり

非夜月にきはゆ付てハまし何かといふ説あ
し五句きらふといへり

神とい字ハきらひてといふ同替てを
嫌なり非祇ハあらしも

とと云字ハ人といふこそも
二句きらふ無し

春日　り幾日などよめり嫌や春乃字日の

亀井　字一切りこれとまぎらはしく名所なり名所りあるをもといふ説あり

河舟　一切り帆振淀乃河舟舟引振や渡して

川岸　もつなぎ舟小舟河もなりあるを

河音乃瀬　あるとふ説不謂なきりにきよ

蛙　りとあり柳と付て庭垣門など

貝　雑なり出勤やるもを生類の嫌やうよ

まぎれやすきものなり絶待く

かろうなるこ潟乃なきといふ心なり能も世

乃字りきらふなり

門　又戸などとさしとゐりなどを付る所も面を嫌なりとゐりの所り外にもり家職など

首途　り由良乃門なりの類は句嫌といふもたゞ門と付ても嫌とはいふり

垣　二なり門面をきらふ出乃字ハ二句嫌なりり居所うあるしれ

二なりくれかとりいひ一なきとも二なりた

しりれかくと二もなし

冬　ふりふ面を嫌やうふ帆居所と説なり二句きらふや○たゞるとういふ業

なしてても居所り二句嫌二句乃なハ神祇も一れハ神なりといふ説あり神

祇なり流るゝり居所ゐる

不知夜　うり世をいふも世をよるなる世とも人の付

隠家　たゞ一居所とす神を嫌ゐし

ゆりかゝし　杜若たゞ一くさのことくれ也付て
幸や　一きらなし
枯野　ゟ論冬也り寒けれどもひて八
季乃内りかくのよし乃田下きれ口
枝なりかく入ゆきも一ゟま年八前しま入
うれ野　鴨なし物り打　由り田　何か定れ
鴫を鳴やし　つし
田を分と一るそあしとりかともあるへし
ういて
楓とまゝちの用しゆりを葉くり八きなし
きらぬなし
くり知し　とゆまくりかきかと也て鳴と
只一冬也り雉子付ても絶なし　何も
鶉　順猶とて國の治乱をあらめさん
書あまも也り八和漢ともみ同民皆候を以事

あり皇乃使かといふてもそれ心なり此旅ら
金り鶏かと付ても分別しりれ
鶏うり一小たゝかり一あさふの一とせ
鶏うり　三なり　と桜りかよのるれを鳴し
由り場　かとり末紫妹乃田ゆくりま不
可然鮮もお逆せり比與なり
猿乃うり衣　うり場乃り小不嫁うり枕も
場かしたゝうるうろ心きりたし
うりえ乃うり衣りそろてたゝん句なりもう
てうり鳴やしらくふかりとも無紀うや
雁　書一妹一似と二なり猟得八書妹乃甲
りきや冬かよのゐりあうえ書乃
うりきへうつとれそり雁も妹なり趣ゆう
ゆりてまそくまうるといふり人のおやまれ

まや

厩 二まじくこれとつゞけ様はなくなとかくて
いひてもまたいあるべし

馬の故里 りとより所有りなるを挑とも
なほ二の句にてつきに
くりるとふるりにくきにとなふとい
これも二句まらぬ也し
かいなり たゞ一字やかよ馬用するや悪白
山家とよありて所ゆかぬといふり
たしたるとといふり定家卿もいひしとあるき
まち未決なりそれのみくらしき馬とつゞけ
心えてきくやしひをいひ又ハ雑をさしていふか
その縁を用ゐるやこの類おほかれよくもれとも
あるべし

め馬 櫪といふ字あり不嫌といふ縁いふて
付てハきらふつきふさい無り

卵 まじて又馬の子とありこの類いひなく
二あり年おほし子といふ字酒を嫌ふや
かさて紀の字し 生類なり 鵲 和名かハ
乃すえ生類なり 此書なり たゞし七夕
めうさうこの天河あ邊よ
めうさう申也なり

蚊遣火 生類なり 分編衆分なり

鐘 只一入道一釈教一異名り 一釈教異名
不分明の自然為名別者不及沙汰
其以上新式之頌や名則たゞえささまとふえ
きりりとも息鐘とりもの句とよる類あり
つし示證この時入道の外にてなるわたるもの
りまむも晩鐘なり甲古よ用ゐるもいふ又
へ逢り
用なりや

けふ 非生類 離句非り
つきふさい無り

冠 衣類なりあしを

髪とひげとり眉乃霜なよのおつけへり
らともとなよの数人編さうへりしを

雪乃雪 冬なりあしを降物なりあれ

霞 なり地かろ植物なり甲古きらんもせ
いふなり今ハ植物なりさきまり候ゆ

も見乃袖 気ありものもといふせり
めし

影と陰 此二句なり日うけ人分けハ影や
山うけおハ陰やうらくうけも
影なりうこうさうけハ陰なりおけハ影や
夜うけ出うけハ景なり此外こまでもあれつ
なるうもの
うれ物なり

陰影京 いわれとこの二
句きらふべし

陰 なりしものなれいのまも二句植と
ものこれ山なまの類や天の下文
りそなよの数不植物で清水の月蒔
まかときらふと見し言りよりけり

影 なり岩根垣移るとも植つて陰山根乃
字をふかと見て候ありたるなり

風 小野なこうしなとりいひても植物句なり
松乃ひさき萩乃見るにしも二句植や
う物なりと馬乃眼かくかと二句植もの

うちわ なりを風神もかくなり植文
かさしれ綿 こや衣類なりあしを袖なり下巻に くはしく注を
かく人乃人 とふとも有乃字二
句きらふといふせりあし
きしりれ

ずりは付て色々趣りもをかしきもの也

方　ありくはなてるよりて又とみなすの字なり分編五句嫌之

かくしはわるし見なすの作といふ字二句きらふなり

作数　と云事岩根衣に伺ふとてし見といひても承なるなり

かくし志紀　は如何なるとて不嫌きらふといふ説あしくといへり

うつへ　小は色なるの色乃字二句きらふなり　かくしたへ　北東に新なり

ありて見乃字二句嫌名いなりあハこれを

かくつき　きらひもん

筐　けしくて八方小も取乃字見乃字ともは不嫌名所乃事や作りて人をたちぬるなり

筐　は如何也山の嫌み乃は清也ハいらさといへり

たつあ　なと云ふとえは葉つらへなとといふなり　二句きらふなり

これの文字乃為二句きらふ色し也

也海　河ゝ

かえるさ　とふことえ人編乃ゝにて乃中なるつし為雲なとゝして不似合ゝれとく乃ある別かんちうるなり

雲乃通　なとも海乃字なりやの字なくと云説不用也すき之をなとは返字なり

乃通ひ路　又ゝにも見なても二句嫌なる説よ新の方と乃通ひ路なとにハ海見もとは

めるきらふとい通りいるわをきらひ二句きらふなり

りたるといふとも一なりこれ外はあるまし

かな　ならふ六文あるへし　なとふとて五句さりきらや

うれし　従准之　一ヒ外称ひらな一なり發句乃と定

やうりありて中三ありふてとめ

さりに待ありとふ説あり一向都道は以

従なきまなり乃中説や式とふて空

一切不可有混雑して不入事なきとも無

説を立るの所さ定めなり

式れ字　發句乃外ハ六ハあるへうきて称る

ひらなハ文あるへし

雑　とふ字ありこうていねそてなと云詞

従二句可嫌背てを嫌へきま治定せり

うなし　紀　一夜あり二なりつくさなとも　同

しうく乃ことえ可准之

すなし　梅　先えなめるまなり霧をさらなし

梅なとハあひたる心なりうつ

こしわれ乃つなそらなしとなといふて用なや

ふとのなし梅を用し能も梅ありなりてさう

しやうりうそ付色し

いうに　なとりしやうにおよのかふまう説

いうにとふても詞ありてきらふ

何もいろし　紀といへり

まやうに　ことふりあるうになとふハかなし

もニ句可嫌二れのてふときや

雪うかなとの　なよのうこうひ乃かり

二句嫌や　従准之

りこい　り無乃うちえかなし　事也皆て

とさらふ色し

かさね字乃事

しうくうそくなと云

詞付句も打あひと不嫌

よ

代 二と云ハ神代一君の代一たるへし此外ハ
御代なとゝいへるへし御代といへるも大君乃
御代なり
代々世 ぬる句去やめくるをあふて代なとし此
代なりよりあふさかるとれ此世や
世々 よ中といふ字二句嫌へし
世 有捨しがたし人のあやまり也 不
語 平世一云世といふを用ゆるなり 述
懐乃世一 佛乃世一 云有一句去五なり 又
て世ハ花盛なといふて平世なり 浮世 遁世
を遁 懐乃世なり 前乃世 後の世なといふも
の世なりいつれも打越を嫌ふや 戀乃世ハ何もの
うつりになりとも一句去へし 此外ハ 余て五なり

奉門 文選よりこなりよまて人とよめり世を
捨人も此乃字入てハ世を捨人と書也
遁乃やと 又物居所あるよ嫌ふ
遁生 居所なり二句嫌ふや りもまとなり
を居所なりこれをまもりつとも
よもすがら 浅茅生なとの生乃字打越嫌ふや 百
韻なり二つりこれあるつさり
喚子鳥 たゝ一鳥や 家々の秘説もあまたなり
鳥乃鳥とつり心えつさまなり
(よふこ)
言葉乃よのなり 里なとなりハ其紀をのなり
深山なりよこなりしハ嫌ふなり
時分なりあつもの嫌ふよあり
春の待月 秋
秋乃明る よ月乃待かゝるゝてなと いへる
となり嫌ふとハなりけれとも 三

なかめけれハくきりのなり又心あてもおもひ
ころも夕に入日なと待かよのまやや
うつ乃ま万端りなりあつきさ事なり
秋乃曙といふ時ハあしを
夜半 にへし 百韻に二 霄 時なりあしを秋乃字なきらふなり
よるしも とふとも常住乃事や 秋乃字の外なりあしを
横雲 秋なりひしまくつりをふ まハあしひ月乃中く出るとしるし
まころえ思さまなり
みり種 りなりつくろなり花によりて野 流くろすあくもりれ不可まてを絶え連入也
吉野 に船ハあれとも京うりみて 歌りをつきすいてと云なり

吉野乃國栖 としてもん倫なり
浣の川舟 ハ採なりそ乃外の川舟また ひよありを外なりも艤く
よもひ り吉二句不嫌 絶句許よきく
よそ 一座り又一あ句也 不嫌之事乃あると付ても不苦 絶維之
餘所目 りみる二句さふなりおり月迄 をなりまハ見乃字不嫌之 なと乃よりて二句さらふや
墨よまて 又るなといふも杉なり
た
竹乃宮 非祇なり絶句にまゆへき名 不なりさんあのりあしを

竹 にさま打越を可嫌にけに糸にけ句
嫌や用にけにをして三句嫌なり

木 にはいはしものに五句嫌やらいろ有
けといふも木乃うちや同五句嫌なり

竹乃林 竹林精舎のうちにいふとも式には
けけ乃事しや絶けに可ある句去

木と竹 は乃弓分編七句隔けれし字けに
里なといふ竹はる句嫌なし

玉 也なり似物襄義乃羽衣出中り有
能も只玉と一是は三にひこくなる
といふ事なり衣の玉は清範に有うや似物
乃なるも寛乃なるあるきの名乃事やなり
ひの字なも字ほつきれなといふうるなり
以上里なり

玉 り玉ま玉い名乃ものにいつれもある
きりなり

玉つる 人乃鬘にも草には句にうり
て可用又女をさしても小鬘り
石なり従まいりしてはに去
たけうも そたにはとも句るに
まりをこらひて嫌にくきつきなり

玉 あるもうちと玉のとしめ句嫌やあるものと
まりあるもといふり玉の字にあるも段乃字也

玉乃を りも句なりの令二句嫌なり

人の玉 人の玉のみ人のはちわうを嫌やし文殊
はちう嫌のうちを玉のとなるのやうになるはい
とよ乃まけなも乃とどもはちう乃玉のとを
一向名別のうちれてもなり句とみて二有
すは玉乃とつけり名乃けりは吉野にくき
乃銘はけ卵のことをよかうは志なうしけすし

なり玉乃をくあもをふよりてとよめるハ
賭の名字乃をなり又酉行法師の
玉のを柳とよめるハかつひ乃玉なりあまた
乃心ありた其もまれりますれとも皆ひ合
きらんりハ又同しかるし

魂乃緒のを 玉緒て言の命ともかし いふなりも此哉たく命
も一あるへし

玉章（つさ） よことも二句ニ手にはゐしたし
句りまつく不憚え

魂 り玉乃字二句嫌なり慈もと王う
玉のをなとといそく玉乃字ま又句嫌也

詠 子句ともに一なり歎乃歎ま用ること
とてもあり挑句例檀の歎なりし詠
者不能知と先聖乃詠やと歎式まなり
不給生歎乃さしあれへりきと心えし

田 すり名ハあ場なとのやうなるハ捨嫌なり

田 猿渡之
すり鹿鴈なとくハ庵てもよく挿まあるも
鹿追なとしいひてハ捨也すり二句さらふ
かくしひとなとしきひても同二句嫌なり

田 すり苗代子苗そう川なとのやうなるハ打
も二句嫌なり そうを田すり二句嫌なり

田 すりいなを地ちかなと一切すりあしく

田乃庵 居不すり二句さらふなりたゝいかも
りとよりて居不なり
なとよいとなむまさを付く

田を庵もを 三句めすり市ちなりハ仏部
りくをなふとそいとなむ秤あひえあし

たなかつきの ま田乃字ニさらふ
庵二つして

田鶴　田乃字因につけても知らしうべし
はることなり一字つゝをよめるや
たつの馬　田乃字より七句嫌無し
鶴　二句といふ説あり
鶴に鴇付るなり但此書ハ嫌　馬流れ乃
島なりよめやうなりかハ嫌以にも就
之と云もかいろすあまたありてに入
立田　より立乃字二句嫌なり田乃字も
かる句無き事無し
詠田姫　名所なり二句去るとふの説
あり今都ちり式に名所
たるべしといふ事あり依保姫因む
龍田　に紅葉ハくるしうても紅葉より
立田ハ不付高嶋野に萩因む
釋教なりあらも弘法大師以む
高野山　より乃名所ならず他へなり

高根峯嶽　いつれもこの名所と
さらつなり
高根　に岩ね垣ねなど云句嫌や高根
など称なりの然達もたゞ一なり
高砂乃尾上　に蘇ハをへりしを付と
当らまでもけるやうなら人流
るゝすなり不謂康を付合なり
高砂の松　に山類なり名所ハなりなり山類
にありこそとふ説あり
岩ねと　に戸おやとど嫌居所に八二句去るに
絶句なり可依
句と有すの名も先年説を宇とまで
湊　只一名所なり一湊津湊と一有や乃湊
湊乃よれしかの名なりいつれも連
などもこそ乃たまり一つなりぞ似
とそうろうくも知無し

滝　山類にては用なり水辺にては躰なり
滝津瀬とも書けるは滝の事なり山類
かるもは滝川河滝つほいはほも山類よ
けりし但さかりとなりは山類の色をさりて
と定め候沖津なといふ心也尤可用之
滝はをとなり乃三人のなりゆきなと付
滝あすらなるにて用付して万物りきらふ
するりとをとなしまた赤ハうし
たかひ　と氷室なりしきりをきらふなり
七夕　秋なり星の名なりて月日嫌
なりあり乃河のあふ瀬年のよなり
なりも天象なり二句きらふなりといへり秋なり
小も五句きらふ也し
七夕　きりあり乃川三句
きらふなり

鶴乃字　たゝ一振衣なといひて一作過
すひ　二乃外に紀世乃たひなとて又ある
色しといふ候いりとい無り
鶴の古巣　も出て八句乃内にもきらふ
鶴の古巣も出てりハなし
たゝ一字やけさもありよくあり字ら
るなり花にらハを付ても色よりなす
種俵　といふともえたねりあう
をきらふ色し
鶴　よ末二句嫌や　椎更もなれし
その焼五句嫌
焼くれ字なり　なといふなり小て八亦
りなりもといふなり
たくうよ火二句嫌なり
焼も内あなり

たく火乃事　るいをたくひとつらね
これたくひなり何もなくひの数ハ戦ひなる
さくひ乃部としても同じや灯の数ハ皆聚なや
民の戸也　居所なりあらき民なりと
よう人倫なり
被　なりよ二句嫌也し神りよて足を
ミえたれ
書そうれし　雖と云字なり二句嫌夕時分
小も二句嫌朝時分小も不嫌
たそかれし　なり共よ二句きらはるべし
付句ハきらふ由なり
うつせみ虫　なとは云詞意なりなるとも
虫もまつて虫なと云意之
堪小絶　流けても絶なりうつせみ皆引
乃まとなり

忘　なりされとも二句きらふ也し　たく
もとむも同なり
たと事　小道をなよのつうなる
神付句なりときらふ絶准之
踏取　なりたるとも二句嫌絶欲句許範よ
たりたるとも二句なり文にては
も学ひえあまや地もひまたうのハたえんらう
まうるとなりこれ乃心ハ踏ちよ不嫌絶
大なる世よとりあつふ從なり不論むつく
踏りうりたようよ畑なりよ二句きらふ也し
なとは云詞乃なる二句きなりうつせ
たく　くれ乃なれこと
たよ重　なとは云詞二なりなりくれとそ
なりとをいつれも地なし
なく御末　とはふともそもの川きり
みの鳴なとよあつハ言らよう見

ぬすやまにたつをも紅山中にありとよ
めばいたよりも紅ぬといふてゐなり
たの心といふ綱意は二やたの心と一
つをあらはし

猪

まいなゝぬも不例の事や やう此鮮
すハ似合はぬのなり よいふ句なとハ物心常
こともいひまへなれ なと以下紅の綱皆
二句きらふなり

う

其曉 来なりめてそ慈氏
下生乃まなり

空 田打り一つやせ此外になりそし一
虚言とりなけの事は一物と六なり

虚空半天 何も三乃事面と嫌なり
そらそのめそらと虚の字を
りて天久ろき雲井おいつれも二句
きらふ也し

そらたのめ なとのやうなるハ八百韻に
た一言なし 俳諧之

外面 只一や面の字ニ面と嫌や面を替
ても五句去や此類多し 居所之閑退
ともにう也なり新嫌なり

園霊生 花居所園生とい庭も居所と之
ゆすり不猥いつれも居所なりあしき

そうつ 山田よりのほなり殊なり人倫り
あなそうつなとこなとの数何
もえなり二句さらふなり

袖ぬらし　はなみだに二句嫌なり涙心にて
なく只雪月如く八不嫌也
そての雨袖の露　とも　は　植物なり大
方涙乃心なり　従
なく降物まてり付ヒたらん句なりとも涙
うりなりと志りても恋りなりともなきこ
乃心なり付ヒふうても恋なりあうこにも二
句嫌なりぬりり乃而り有入なり
袖の香　に乃数にし恋なり焚香なども
は　はものなりなりう　作之
そてのあまり　なといひけりなとて
降物は二句嫌色に
う　と一字にこれよ乃数二句きらふや
もりて乃数なりもしの所にも入
そふ　なとはそて字
なりなり作之

ゆそむる　は野山をそむるなといふす
一向ことわることなし
聳物（そびき）　はおり雲霧霞ふりの松竹草なとなり
乃言葉ハ世のたとへなり松竹の煙
との煙雲乃上人の井乃庭胸
木乃数これそれゆゑの所にて入なり

つ

月よミ乃神　名神なり月よミ乃森
も名所なり名神八名
所りなりし
月　面り一句八なり但名残乃うちり
もなくともなしてき統も七もき
月乃るすりなりもき人乃またふるや新式にえ
春月たゞ一有明一三日月一名すり乃るす計
乃分にそて八ちかうも此条建治之式貝也不詮

春夏冬乃月一所ハ嫌ふ一いづれ成
とも三季ハ一句以上二句なり三日月も四
季のうちにまた一句なり統て春一季乃うち
にありとも月と有明と三日月と三も有
無し夏冬同じくいづれのうちにありとも
三句にあり有て月ハ嫌ふ八も有無
し有明乃ある雨の月なし他の季に月有
てやうて五句三句乃うちに嫌乃季不可統

月 に日次乃日うちにこれを嫌ふ春乃日あつき
日より日日見てくろ夜乃日定まる日見と
かはるよの数日次の日なり又日移日乃ひ移
日夕日なるよの数もらん乃天象なるゆゑ
月に三句

月次乃月 にまきれ候やうにいひ
なり　なと二句嫌なり

月 にまきさう候生不嫌長月神無月々
句嫌五月并八月といふ字あれとも去

もきらへ

月乃雪霜 又すり嫌之とも天象降物と
もり嫌といふ心なり夜乃羽
入てえ祝降物月乃あらきすちりといひ
て安乃ゆき霰不混合ゆへなり又同おに
月を雪り見るしたり称なうえ冬なりとも
かりのになるかへしもたゝ月霰なとかわりハ
天象かりわなり是を又すに嫌といひなり

月を見て なとしきゝ経て末乃まれ月見
えてなと又有月に見乃字

むかしてハいふなといふす不謂

月乃秋花の春 といひてハ秋分にあるを
やいふす宗祇乃説と
いつとも但いふことといへり統も秋分かうつき欤

今日乃月 秋をまり月入逢に浩月日に
むかふ月三日月乃出る夕月

東にみな東なりあるき

月乃宿　居所なりと書てある好士に見ゆ
けれどもさしこともあるまじと云り
他發句などには月乃宿可依他意之
人倫

月とあるし　あり

月乃友　人倫りけれども以下は月とある
しなとはいふりなるや　依句体

人倫なるべし

月代　玉乃光なりとするべき事なり
他准之

月新し　と流してまて二季也しといふ不謂
流れまゐり新とむといひては文有

無し日待同前

月乃てしお　塩月而とも可嫌他も此道
や他可依句體といへり

月草　月乃字は入る句嫌也新もかはゆく
月草なとといひて八武乃天象也
流し　只一流しとも季なり　非ハ草
なりいそてり雑之

鶏林鶏峯　棲ぬ山鳥なるやし　山鳥と
峯棲ぬ山鳥なりとも不嫌くとありく
雑之り文他鶏林鶯
中比きらふといへりときさ上古乃不嫌
候を用てあるやしとことむく乃ことく乃
ますまく見まく無きものなり
流る　たく一季りといひて一如しいひ替て
二ある多し此おるもあるき

鳥羽　乃鳥羽同なと二
句嫌也　他准之

常燈　此歌なとりし此所の乗ある此
所とはやまるへ見付やまた紀あめや

津国乃なにはも　山城のとはゐなとゝいふ類名
はりおりうしを嫌なり此けなる詞にてなよ
もともの名所又ハ有千し紹巴之
難波津乃つりによきあまり奥津なみの
ありけり不嫌なり但同しく紀
やうなりもいひとなり
あはつ　なかを乃けりし又句去や百韻は
二ちりといふといふわろ
釣（つり）　海士舟に延宝不嫌之但釣舟なとゝ
海士人乃浦より出て是等をとりなり
とあるに嫌やしなとてりあり付句も神なり
むかしのりひとつにいひとあり
こ乃類なりなりまつさるや
つなく舟　帆掛舟外帆掛舟再とい入つなき舟に楫をしてなし帆掛

流なて　なとほとはいきさるなきといふ
霞かなて　年あるやし紹巴之
なとも我かなり嫌更てなと
でも前篇我なりめとき
流るゝ　説に流るゝなとまたさて宮川
久文有てし但可依句作者
帝乃功者及むいなり一の有なり其次
妻　あとあるおり妹なとさらふ思し
つま　えりのよあらしとぬひけ乃類はわとさ志
役　せるすなはぬも似て聊之
帆人倫馬太なとのつひ　まさひき
をせうりもありしゆへり　つなく
つなし　といふに松杉もうし　両方に編也
やいふまつれなきいあしく　松杉なか
例の
用付乃まかりなりり

鶏面 つゝみつゝみなとゝいふ絹をさく一
点より一二迄二十二なり何も耳また
ことなとゝおもひえ有さりとも乃こと
乃絹の数ハ大才二つと心得べし
つゝも 為我と云てハ其乃字に嫗とふ
緞不縄きらふ嫌りしも
はて たゝ一点り一といへりさし大略抵
やゝ点にあらもといへり句にもあり
つせ流り 百韻り二なり上乃句にて
よありきらふ嫌し
流く 意りらえして中の数りてなくも
二句さりなり他准之

ね

寝 字同なり如乃ハ此外なり寝の字なり
なゝいゝも同前なりこなる寝乃字に

面と謂鳥獣乃如きも名則乃なき也又有也
寝覚 よ夢二句嫌中あるハ寝さめまた
物なりの由くなり
寝さめ なとゝいふこそも勝才三それ外面連
歌より也と寝さめもうなりしきこえ
乃あれえなり他追善乃命なりてよハ似たに
うつもとしさ緩指南をうけ給ふ
眠 まおくらも二句嫌なり
閨（ねや）より寝めるまはせてときらふ嫌し
寝根（ねる）うぶねなとのり陰きらふ嫌し
日新なるの新ハきらふ嫌りしを
山岩ね とゝきになるの名
おりをゆりなり

な

なミの神 も名所也 長柄と書と云又中所ある説有之 難波 此字不嫌之

波乃花 なミに花ちりかゝれるなれは正花也ちりかゝれて去乃雪也桂枝に入ては正花りあるまじき去にあらはよき色也あるを花句拵りより波と花にたとふる句なるともとりなりとも正花にあらず去にあるへき

波乃雪 冬也春夏に嫌之秋の句の嫌やうまゝり可混合物也 雑也一様なる時用 郭公此時夏頃これ新式乃詞なりいふこて乃ハ夏不嫌之混合なりともなみ乃雪れなミにまちまちにをもいふまゝにて夏冬に混合をといふなり

波の露 秋なりのなり 雑なり

波枕 舟とねてもたひといふをいふ嫌なく礒汀なとにて乃字也枕なるやし

藤なミ 尾花なとよると何も波乃字也又句嫌とより水辺に嫌也

なみしたゝ 一なるへし一段二なり波乃なみしれ又是なるなといふかとも

あるへきとも不嫌 不謂

なこその関 山影なりよふ子鳥さくらなとよみ添歌なりなとよみ柄のあるまゝら

難波のうつミ こしきらふなり

なにはま 流人なとまさへていふも枝にも二句嫌 但可依句なり

なけきの森 物に二句を隔てにきなとり也といふ色ゝこそたち色これといつて枝りのてりこそハ

當代 恋なり 植物のうつりをきらふ
梯子 色し まぎれて衣の竹とも又有季とし此外の
異名をいひて又有色し
なくさみ草 なるの数 植物にあらずも草也
字にてなくさむとなり
夜の雨 ふりものなり あしたも夜の
字ハ五句無季也し
なみさの霧 ふりものなり
嫁あり
涙の雨 冬なり 降物ハ打越嫌色し
之なりなごされ 冬のしられまぎれてハ又不可嫌
夜まどれのしられの君より
ただ一あらそふべし
夜 うす袖の霧 袖のぬるると二句嫌 但
依句体 まぎれ袖の前に嫌之

袖 に袖の月なと二句嫌といへり 袖まや
ころ月なといふいつも折々嫌なり
なミだのつゆ 恋なり そびき物なり
夜 ハ人の夜なと二句嫌 鳥の夜と山の夜
も不嫌されどもなくといふハ二句嫌なり
鳥も山なとの鳴 に人のなくハ二句嫌
色し
鳥のなく といへ鳴の字同科なれとも雨を晴
やの田鶴の鮮と云部となくとも
なかるし雲を雨しうしを
鴫の羽かき 立なるとなとあるまらふつ
なかこ なかり
此世の數百首に
たゞ一たるべし
なかみ神 神祇にあり
もひといふ字ハきらふなり

なかめ二句なり哥をなかむといひてハ
こ乃外ハ有へし
詠に月不嫌月詠といひてハ二句嫌なり兄
雨も字ありきらふことハ不嫌之
雨天（あまそゝぎ）たゝ一字ハきらふ迄てをきらふへし
くもり見そりよ入
雨乞ハ秋雨なといふもりニてハよ
もの乃も雨たてハをもまて有り
名残一座ハ一草まなとよまるゝあるへし
名といひ
名ハ名残ハ折をかくへし
餘波（なごり）たゝ一座ハ一句なり名乃字嫌ハ字
ともハ二句きらふへし
中ようち二句中恋をきらてなからきらふなり
とあるへし

堪（すへち）人倫なり甲といふ字にもなといふ字には
二句嫌座乃甲なしえ折を嫌へし
存命（ながらへ）ハ長永乃字とも二句嫌なし
不案（あんどさり）ハ外乃字一切不嫌之
待かねふなせハ別乃字二句嫌なれよ
あしを折てときらふへし
なひまよまなひく折てをきらふつさや
覚乃字ハえうなき付句ありきらふや
あらまうとしもみ句ニもなり
無も字ハ何も不嫌付句も心引
乃字ハ付ケなれつまれいと記なきつ
世は昔くなしなれしなし夜も出りそくひ
もなくさ乃句せいひさ月うれ二句嫌や

哉　み哉か治る句ひなく　あつかく　あやなし
ゆくうちなにと　いふ数ある句嫌や
あらし　面を嫌なり三句の心まで　なけきを
嫌之て小をもの三句れハ哉をきて
ときらふなり
哉とや　哉なりしよきにてなりくといふとも不
嫌なり小分りも哉の字なりにも
里分りハ也の字なりせとつりひても文
字の分ぬ中よ分りをそ嫌ふりのなり
なりとなり　しちをもまの句をいひえてそ
付句つりときらふ嫌し
なるとなる　なりとなりまれとなり同
しれすへいつれと二句
きらふ題し
なりなん　なとも付句あれりをきらふ
嫌し

なりやなかりけん　なと留りまは二つなり留り三つなりまで
なかりすハ哉てときらふ嫌し
なり小分りとてくるしきも二也と留りまれ
又ハ用なりの中に一なり此准之
やと留り　同前也
りけりなるかなぬるかなもかなしそ　たとへのなり　二句嫌也
ら
らしせらん　同類なり二句嫌字　らし同前といふ類も
不相一向是を嫌ひ除す　となんなとの数付句まで不嫌留り
らん　なりとも二句きらふやし此准之

らん　小やらんちらんは影不嫌一字なれ
ありらりも上り続くなり
此付句を嫌つきなしと也
らん　きらんなしなどの詞三つあれは
てあるも好てを嫌ふへし
蘭子　蘭なりと嫌ふものなり

む

室乃戸（むろ）　此居所寺小路を嫌とは続
折まては嫌へからす居所也
あらまとりえも打鐘は居所不可然といへり
室乃八嶋　山影ありあらはる遠は
あらはを
むろのまやま　名所なりあらはを

梅　只一句梅一名木一本梅一句葉一
青梅句葉なとは脇乃句すきてあつ
かひこれ新式乃詞なり花もみまてあつ
かふすりいひといふ也ふ心なり取合
てみとあれはよけりみ乃ものも一もう
よこれあつきとあさてもうまあつきこ
といはし付像り治定を
梅雨　不審と新式りあつ八梅乃雨八み
乃いふ流く時ふから雨なり五月雨
かすや花も五月雨まねてありましほとに
心なり又あるこきまはりんとなり
急雨（むらさめ）　一村乃字り二句ちうきうり雑や
花ともに時宜り口伝あり
むしむる　よ村乃字二
句嫌也し　村　居所よ二句嫌
此むしの箇数
村雨の影の論あまりまてはいけれ

むまや　まや驛や宿をいふといひてハうまや　埋木　植物に非哉と嫌ふべし
むら鹿の庭心とハ色の事なり雑なり
筵　たゝ一法のむしろ草むしろ苔むしろ
さかむしろ是のみなり又有以上二や
むしろ熱別表なり絶法のむしろ字の
席　酒のむしろ年と表なりにあるもたゝむし
ろなりとも同前歟
馬　一匹一以上二なり打を申なり驛馬の
もれけも面を嫌なり意の馬しも
ゆく駒をもしも二夜り折りを嫌なり
なとのうらうしに車折りかえて他者
馬　用捨あるやしるなるをこの心りにあると
しふとも挑筆なりハさすへきも出なりや
作者によりてハやうのものも兼なりきす

なり毎に此類なりしさしあひとハなけき
ともこゝろハ一なるなり連歌もお後高意の
思惟かんかうなりゆくへうなりうけきとも
嫌之
馬場　生類にうちこしをきらふ也これも
なをしけ同前なり
驛路　同前生類に打こしを嫌や驛路とハ
唐にハ勅使なとの道をいふにこそや
あり日本にも非功皇后の御時よりもし
さかり驛路の驛とて有りなるをすへ有
驛長　おとろくするなれと詩も驛
路りてのまゝなり
むし　一松むしもむし以上三やこれかり
きりくもを持鐵ありそとへてあり
ちくさむかむしかといひてもたくさきなり
のすなり三の外なり蛍名のむしのうちま

あらやし見乃山　藻よまじむ雲くりもむ山
なれも同なる欲つゝ里さす山かるかまいり
山ふの雁なさやし覚る乃山よ打りを
ことふやし夜山なとハ文句よ有もむ山
恐り衆なりめと不称山とひく
是と四季なつ斎といふ有り
むかひ　衆なるなり雪ときのなり
背（せな）　背ハ一句ことなるの数きらふなり　背
うしろへわとこふなり
胸乃霧　妹なりそひきのうちら
むねのすり　こしときらふなり
うちろこ　用くそひきめよちら
聟（むこ）　りとを嫌なり
句嫌やし　むけこと　衆なるなり
意也

迎（むかへ）　よ向二句嫌やむまの名れむけを不嫌く
従付句よそいりとりいつり
むらう瀬　よ打乃字二句嫌や惣別うら
出てなといふ打乃字をうろ斎
詞なるゆへ二句こふなり
生海（なまうみ）　よ命不嫌之生死よ有らくこふ
色し
むかの花　雪乃まといへるさきを不好詞
なりけるとも乃まちされとも
不好といふことといつさしよま執之ホくまこ乃
趣なるし

う

白拍（さうあひ）　拍猿りあくを大方意よ用れをとる也
他句拵りよ新へし

哥はされども不便但言葉乃たことはれ給
つゞめかなとも物りを便也しりとより打
かうよきしやの給ならの執
あとさらふ便し
嶌様一かくして又一といふ
うらひを 此数り百千鳥うらひをなり
ありときらふなり とありさ山ゆつよりくちよりう
鵆舩かりかてひらく火とをりはへりゝ
をうらひなとりかねを付へをも
うれ孫乃とり 衆分りあるそう衆
かなへゝを 別よりのゆるさき
かたりへるを
うつれ床なと囗あ衆分りあり 歎
乃とこも あるし

魚 禘用乃外也鳥獣也ふれともうたも便也
人のあやまうまかなり
魚 りあとうけなどなかのやうかなりのき
ふ従准之
うろくへ 生類りちうしを便なり
海 たゝ一名不り一なかちり此内よありて
なけうと海乃魚名乃心なりて海り
ありと便なり不新非の事なりて水邊は
て不可便打なりうろゝ乃ゝらきし海也
まかりハ新非なりてろうをれ波乃なとよ
めりハ海なりいろ非乃ま欲しもうとこ
乃すかりもまろうたゝ一共りこれ外
うまろ乃京又あやしとより又しか みうこありと
外に又有へきす うなかゝり か
いうとふ様なり ゆるなり

植田（うゑ） うへ田に打越を嫌 苅田なとも同前
植といふ字まへいつれのとりてなりとも
たゞ一なり
浮木 うきものりあへを
花なとのうつろふ はとしれるうつるなとゝ云句嫌
なり 年のうつろふとあり
もれを うつり香 袖とも枕ともあてていゝ
嫌也し くとひとり京にありとも
よりめ物 おりり一折〱なり
有也し
落字（うちもじ）の 落といふ字うかわるを可嫌也
うき物 いうり物といふ字がいつれの句とも可
埋火（うづみ） 火の字 下の字なとわには
冬なり 上乃字 一折〱なり

うき世 憂乃字に二句嫌也し うきといふ字意の句には字去りなり
物編ていふ紙立る去りなり
うきめうきもうなしきにて愁つゝきさな
憂（うき）ともみかな二句きらい嫌なり
なとり浦といふ字不嫌浦
うらみ よ心なし なし さゝつりなり
うきひしなきにても同前
うつ屋 まやともかくなり居所なりうら
うしきらふなり
うら見うらむ 二なり とはひとへをともを代
恨（うらみ）まうらみ二句嫌なり意 うたゝ 猶 哥なり
なかれ両意ちらへつさ欤 なり
まうれ不嫌置りかてなとい異字
うら脩 紫もり称なり由字に一向不可嫌之

うらまくらは　別号なりうらまくらすくくの
一まくらかとは別号なりも
折と云字二句嫌なりうらひくくらう
もし数乃ますなり彼乃ぐ衣うなりを
もっともなりよりて五句嫌ひ杵そを
きらふなり有もし乃こゆうたまかよの杵乃
字このあひさ二句去なり杵て八句乃内嫌
とも二句嫌なり此るといふはうらとくの
あけるやうらよのことは不混如此なり
いひつけて云網よ人見あやまらぬ乃なり

升

雲升　と杵のすかしてもくしぬるなの
あるよ五句嫌ひそれゆゑの心あるなり

大升　まくらしぬらへまと
居不成ともなり

升世紀　よみてかへも関乃字也如此の網
いひ人ても百韻り只一なりせ
りの候りも入なり

宮守（ぬかり）　升小ハ二句きらふ守よはおりと嫌
座きなり

猪　百韻りたゞ一なり雖也くの如くと
いそなる物何も一座よ一句なり

讀（ぬえ）乃字の事　式目よ此条今用ならず
出て新式なれも旧紀ともりて云
とみてより両てよあられ詞を新して初条とれ
しきて詞とくへくあるたしる両を去りて
式（しき）目（もく）小ぬれん乃字　いをるハ附句なと乃
すなりたるれかとまりたるそれ去
りなのすなりあさ中ふ去り中ふなるの中間な

なりぬれはなりの一向各別乃事なり由へすり
のへまきらしもさらに付るもくるしからす
紅夕乃字も嫌て名乃数なり
韻乃字といふまらり銅乃字とハこれ志
まかよのきりしのまや一切に近
代これをさらす
韻乃字 嶺そを嫌但物りよるやしとい
嶺ハ山といふ字里といふ字なと
同面にくるしからす新式すりハ折なとも
おなしおりやまにけ里されと短りひかなと只
二なりさまりハ韻りおりを嫌めか小て句
き返ハ二句さりなり更ハ想別定むわかを
みんりハ二ちりもつきのやいへり

の

野乃字 句輪非観なり
野に京二句嫌なり篠原なとも不嫌 田
両原 同面不嫌 あしたのはらなと
ハ野子二句嫌もりしのはらも入
野にかけるる句 野へ 百韻ニ二あり
きらふへし 毎し
野分 面乃字不嫌その心にあらは狂乃
字の心なり なとも同面なと
し依句折面乃心にこれあらつき歟
野を遠く 長なりうへのようちこしを
きらふなり四季乃かすも入
もちことり のへ乃色山乃ことり同色なと
も拙物よ 作まうら餅を嫌也
おとりひてハ同し拙物よ
野山乃志くら うらうしきらふなり

のけゆく秋の羽かと一なり此比
ともつけたり

新可准之

聖 に田を付たり不似合さし合ハあり
にわとも此比乃心なりこれ始かし

聖分 秋なり風なり又句野の字分れ字と
とに二句嫌なりのそれハ八月乃物
なり両句を付たりあしくかりきとへのあや両
まるや此比乃さらひかくすかりけりまなり

あやめのや 細衆のやなとは羽聖にあり
をまもてにとえりなり

法 御法乃外に法令乃法有也 佛法 法堂
ての法の御法ハもとハ前陰氏二丈
といふなり

法 に船頭なと随りあひ付あひなり
又毎車にはり八用付とてすると嫌也

軒（のき） 二なり乃きわ端といひ御かにとまえ
とと二有也他乃きえくと二ハかし
軒乃しつくまり 物にあるそ軒乃しつ
かとなくてたちら両也てハいくといへり
くといふ降物それもの
軒乃玉水 りてより雨降 軒乃あやめ うえ物
物の過に雨を 水過也
乃末 りひきしかるしとかりきうえ
し

長閑 にはえいりふ二句嫌それなとかるしく二
句嫌所なりへ

はかり にとの字二句嫌 三わり嫌
うくここまに用 三わりなり

軸物も へよ
かといふ乃りもこしな不
嫌くこれ栗乃やかかれ

法次なり

お

老 只一座まては一 老 は白髪の露なと
似せ物にハ二句あるへし

老 はむかし付句をもて嫌ふといふを
あやまりや昨日ハ今日の昔とかいふと
例のまゝあり然らすしてハいくとせ付
句まハ不嫌してもらうしよ閑種らす數異
し老なりさはこれハ述懐の二句渡り
さまゆへなり

老 は若き事かひらむものゝ事にハ
ことさらなり

老 り鏡の波露あかつき見の付と
なけくなといふ數よる句嫌し

老 はよろひ二句
去嫌し

老 の翁二句嫌 作句并不嫌之とハ申
まゝなるにおもひの篤などいふハ嫌ハすそ
と云説あしく二句さらふへきなり

釣乃翁（つりのおきな） 山炭うりおきなれハ述懐りあらそ

親子 つけても人倫なり

男 一丈種男といひて一たいれおもひのちかれ
なとゝ云て又有之如ことに而を嫌なり

鬼 千句にも只一なり生類に嫌之出れ由
きは旧説にて只鬼神の像不可測強て
不可及其沙汰歟以上新式の詞なり

大井川 りぬせぬきらふなり

尾上 に峯きらふなり此集不言に入尾の
字上乃字ともに二句きらふなり

おく山 一座に一如此山乃數いつれも一なり
山乃おくなといハ又有へし

奥といふ字折に一つなり此外心のおく
かとこれあるやし此数無際限由人よ
大概をおくはかりのかり
松葉　ひて一これ新式目の頌なり　一松の字も柳のかまい
おち葉　よみくれを称するなりおち葉冬
なり松のおちも雑なり柳なる
紅葉の成分年の数折や折を分て此句
に一以上三や楸柏年も梅なり　おち
この中にて可を落おかれ竹のも花のちる
に落の字不可嫌松紀の字なり日記の
おちかゝるも一向これをきらふ也くれ
松風　凡よも用て可用す可為和哥
萩　たゝ一冬夏の句に一懐紙一にかゝき
唯三くせに二句嫌也し
懐紙をも入てまやし是新式の頌なり

も海お紀折を入ては同季なりとも春
無しおとき三つまりあるといへとも嫌の外之
季り一折と二と心無へきなり
萩　よ色ものまでと付べきといひて古人
制し来り志かも二句きらふ也　但
お紀の下りえたる以前色るゝりまも
うつりとくれかわりも柳りき物なり一とも
て第一通用まし
薄（おばな）に尾の字花の字ともに五句嫌此数八
大概二句の物なれとも此嫌来なり　但
尾にね不嫌といふ説あり可用之
植物に二句可嫌とし　猿ハ式う
むくて田　入りのによめ句きらふ也し
おもひ草　入りのなり　に火二句嫌
物なり　なり但依句
杯會ちおもひ　胸のおもひなといへ火に嫌也

おもひ草などいひてハ不嫌之おもひのひと
火に用といへりおもふなどいふにハ可嫌し
思ひ乃煙（けふり）をひとりのよ外
うしとまらずなり　おもふより人倫に
おもひよるなどいふ字つゞきなる詞と見へ候　あしそ
おもひくて二あるべし　他准之
おもひ出る　句きらふ無し　て思乃字も乃字らしに二
思ふ　よおもひ　ゆうといふ詞付てもくるし
おもひゆ　に　おもひつゞけといふ詞二句こ
らふなり
面影　並に一句一以上二なり面乃字影の字
ともに二句嫌なり陰の字ともに二句嫌なり
おもうけ　といふ句にもやはりを付るとも
素聴の萱をもおもう付かしてと

ある歌は無月の字を出す花野の名や原
などあるにおもうけと付る数多世これ判断
大方あやまりなりといふ事乃ごとくの
分別肝要なり
御座　居所なり見出しきといふべし
らず也
常　衣数らあり　おもしそ
たゝ翁、衆なり孫さへともに孫てよ取るな
と一切霞汐かく汐にあしく
起出る　ならしても用ゐしく衆にあり
おもかげ　といふ詞悪しけれど月とむ
まひて八悪しかるべし
おぼろ月衆　にかきて二句垂ふべし

く

國乃海　名所なりとハあふミ乃海うれ也海なその数さすり共ハこしといふりハ名所なり二句まわりとも海といひて名所にある也名所に三句あり伊勢乃うミにあ名の外國者うミありいつれもあり

國乃名と　五乃名三句隔へし

國の名と　名所打越と嫌つけても猶くるしきを一句隔てゝいきらひ付ていふ新しうけの物をうらしときらハをいふ也又二句嫌ふのといつうハ付ても也たてもせさる物を二句といひてうちよ猶なる是

雲井　ハ半天也よりて付くさといひ新ハの雲井乃庭などに半天也なりらとも一説ありまるへしと也雲井乃月雲井の雁などよめるハ何もあるへからすと心得へし

あまれとも人雲井乃庭など　尊称ようにてうしときらふつきあり人乃よとよき人ありん倫あり

曇（くもり）　たゝ一月続などよ又一首へし

かる　うりくもりに二句嫌なりくもるよくもれ外のそひきものも一向にわきまへいひ

くらま　とりて句あり物とつけゝ又そもまの名所付へけれとも惣嫌之

轄木　とりひてもりとありうへのあまくし

草庵（いおり）　惟植物くさの戸よ打ても嫌也惣家乃いかにもにて又くさの戸あるへからす

草乃庵　まの下いかにも幽棲によろしきを
たゞ卑下のことゝなり

くさ枕　旅宿りあるひは草を枕とまれしハ
旅人のきまりとりよ旅あるく同旅
ねりあもとといへりいつはりたびなり

草莚(むしろ)　しくゆゑなり　草の原　野なり草を
秋ふるなり　これハ

草花　ときて花のくさのいへり花乃くさ
彼くさの香綱とうへくもしとあり
下絵草花ときて花乃草の床花乃くさ
枕ホ乃類歌のへりさら秋抱も香といふ
文字あしく心得ていふ

花乃草の床　花乃草枕ホに二句花の草
のいふ匠あハ加編み句嫌なり

くさまくら　しといふ句に旅きく旅がよいふ
なと付る同物なり但菊など

小旅までもとてあきへ乃類くらべしす
くさ花抱くなわゝなりふくく心得べきまで

草　ま野人乃事枕などを種乃字なれども
ある句嫌なり和歌の千種よこゆるなど
とりハ二句きらふ也

くさむしろ　くさ枕りに二句きらふ　草は字村
乃字ならでも二句嫌なし

くさり　人偏なり

くさか衣　くさとりなどよえとの小式に嫌
なり草の字ふある句人偏にあらぬ

すゞやかなる草乃はしかりまし
なとの句　秋ふかりあるひは縦維之
執乃字なりあしくさの字なり一向

くさ　くれとまじりつなぎ

しれ竹乃中こ　おと枕にもかいひても
式小樓雨や維雀之
車　れて一清乃車一あくりて三句に三
句乃内にあし　水車ハ白紙のなり
絵やとしよりは水車ハ不好ともといふなり
背　衣影りあられ
ゆり　一くり也と一とあり但二ある心さまと
いふて五絵一当る心し
縫れて一当る　水鶏　夏なり秋なり水
心し　鳴なり
よ夕乃字ある句ニ嫌　朝夕といふて蕎よ二
蕎　句嫌なり申さらきらはる二句嫌なり
蕎麦乃蕎　りり夕清分二句蕎乃字
小ハ同字なりなれども
是なみしは二句さらに心得

花乃しれ年乃しれ　おと雲雀のしれよ同おなしや
蕎乃秋　秋と只詞時分なり秋分にあらし
しれ秋に蕎二句さらふしり絵よやとも
同おなしや
かけらき　とわりいひてハ秋分なり也よ
下くり秋由しり秋のもりきなもの神なり
らハ時分小ゆ秋分ないとそ絵句神よ
よりつきなり
うれしく　うれしれて蕎りありすと只
維れよ蕎乃字よ二句嫌なりて
思ひしす　なもの詞ハ蕎け字よ又る句
嫌なり夕時分や維雀之　蝶衣
三川乃八くりしありてもよあり

ゐすりきし部の字二なきらふや
いつれも部の字あれはよろしう
それとこの准なるへし